

ジャック・マリタンによるベルクソン哲学の批判について

——吉満義彦の論文を手がかりに(一)

磯部悠紀子

序

新トマス主義を牽引したとされるジャック・マリタン（一八八二～一九七三）は、ベルクソン哲学を批判した人物としても知られる。マリタンによる批判はベルクソン哲学の反知性主義的な側面に向けられているため、知性主義的である聖トマスの思想との対比も合わせて行われていると考えられる。しかしながら、批判の具体的な内容は思いのほか明らかになっていない。

そこで本稿は、一九二八年から一九三〇年までマリタンに師事した吉満義彦（一九〇四～一九四五）の論文「ベルクソンとマリタン」（一九四二）¹を手がかりに、マリタンによる批判を概観する。本稿では吉満が論じる二つの節のうち、第一節「二つのベルグソニスム」を取りあげ、ベルクソン哲学への批判に見られるマリタンの立場

の独自性に注目する。

一 マリタンの解釈の異質性

吉満は冒頭から、マリタンを理解することの難しさについて強調する。フランス本国においてさえ、またカトリックの哲学者たちのあいだでさえ、マリタンの立場が正しく理解されているとは思えない状況がある。というのもマリタンは、他の哲学者たちと異なる観点からベルクソン哲学の解釈を行っているからである。⁽²⁾吉満は彼らの違いをこう表現する。「愛すべきペギーの如きベルクソン自らに対して靈感の源泉ともなり得たかゝる魂のベルクソン告白のリズムに生命と美とを感じ得るであらう凡ての人々が、その友マリタンの透明な形而上学的蒼穹の空気を呼吸し得るとは言へないであらう」(六二)。マリタンの解釈は異質であり、他の哲学者たちからの共感を得づらいということになる。

吉満自身も回想しているように(六三〜六四)、マリタンの解釈は一面的で歴史的理解に乏しい印象を与えがちである。それゆえ他の哲学者たちからただ一言「偏狭」(六一、六四)と評されて終わることが多い。とはいえ吉満曰く、彼らは決定的に異なるというよりも、アプローチの仕方において異なると捉えたほうがよい。たとえばペギーが「行動的靈性」において直観する、歴史の真理としての「聖フランシスの英雄的民衆性福音」と「ジャンヌ・ダルクの神秘的愛の苦悩」は、「新しい中世」を志向するとみなされるとともに、「靈性の優位」と「真理の絶対主義」によって基礎づけられていると言われる(六二)。そうであるなら、同じ「靈性の優位」と「真理

の絶対主義」が、ペギーとは異なる切り口から、やはり中世に属する聖トマスの「知性の健康」と「形而上学的知性の再興」という、マリタンがベルクソン哲学の批判において目指す結論を基礎づけてもいると言えるはずなのだ(六二く六三)。したがってマリタンの解釈は、歴史的解釈にかかわる問題としてではなく、思想的解釈の「究極的真理」(六四)にかかわる問題として扱われる必要がある。しかしながら、そのことが容易には理解されない。マリタンの解釈が他の哲学者たちからの共感を得づらい背景には、こうした事情がある。

二 マリタンと「二つのベルグソニスム」

ではベルクソンは、マリタンによる批判をどのように受け止めたのか。マリタンの著作『ベルグソン哲学批判』(一九一三、一九三〇)⁽³⁾は五百ページにも及ぶため、ベルクソンが実際に読んだかどうかは定かでない。しかし吉満によれば、「ベルグソンはマリタンの批判を最も手ごたへあるものに受取つた」(六四)とみられる。ベルクソン哲学における問題の展開は、ベルクソン本人でさえ想像できなかったほど「全く個性的」であるため、マリタンのような発想にはなりえなかったかもしれないが、マリタンが提示した『二つのベルグソニスム』の普く知られた定説」を、ベルクソンが知らずにはいたとは思えない(六五)⁽⁴⁾。

「二つのベルグソニスム」とは、マリタンが『ベルグソン哲学批判』において区別する「事実のベルグソニスム」(bergsonisme de fait)と「志向のベルグソニスム」(bergsonisme d'intention)を指す。吉満の理解に基づけば、「事実のベルグソニスム」は、持続の直観に基礎づけられた理論としてのベルクソン哲学のことであり、「志向の

ベルグソニスム」は、主に『創造的進化』（一九〇七）の時点で示された、生命の躍動を絶対者の把握へと向かわせようとするベルクソン哲学のことである。マリタンの考えでは、「志向のベルグソニスム」は「事実のベルグソニスム」においてではなく、「聖トマスの道において正しく生かさるべき」（六五）とされる。吉満はここにマリタン自身の聖トマスの哲学的な哲学が形成されていく軌跡を見出す。「マリタンはベルグソンを踏み越える事によって彼自身とならねばならなかつた」（六五）。すなわちマリタンによるベルクソン哲学の批判は、ベルクソン哲学それ自体に対する批判というよりも、マリタン自身の「真理把持の戦いとして」（六六）なされたのだ。マリタンにとっては、聖トマスの思惟がベルクソンとの対比において「如何なる生ける現実性を」（六六）獲得するかという問題が重要であったと言えよう。

三 『ベルグソン哲学批判』の独自性

マリタンの『ベルグソン哲学批判』が持つ意味は以上の点から理解されると吉満は強調する。『ベルグソン哲学批判』は一九一三年に刊行されたのち久しく絶版になっていたが、一九三〇年に再刊された。このときマリタンは、自らの著作についてあらためて語るべく、八〇ページにわたる序文「ベルグソニスムと形而上学」を付した。この第二版序文から吉満は次のような言葉を引き、マリタンがこの著作に対してどのような意識を向けているかを示している。「人々は如何なる判断を下さうと、これはとに角今世紀の初めにおけるフランス思想史上イストワール・テジエの一つの場所を占めてゐる。これは聖職者世界においてレオ一二世とその回勅“*Aeterni Patris*”以来優れた思想オレドレサフ

家達によつて営まれたトマス哲学復興の世俗信徒世界における最初の表現の一つであつたのである」(六六〜六七)。『ベルグソン哲学批判』は、初版の刊行から一七年を経ても、マリタン自身が特別な思いを抱く著作であつたことがうかがえる。

ここでマリタンが言及しているレオ一三世(在位一八七八〜一九〇三)は、一九世紀から二〇世紀にかけて聖トマスの哲学が復興するきっかけを作つた教皇である。⁽⁵⁾ 稲垣良典によれば、回勅“*Aeterni Patris*”(エテルニ・パトリス)は、「天使的博士聖トマス・アキナスの精神にもとづくキリスト教哲学の復興」を主題として、一八七九年に公布された。「トマス思想に含まれている英知を探り」「世界に広まっている謬説を反駁する」という意図のもと、第二バチカン公会議(一九六二〜一九六五)までのあいだ、聖トマスの哲学は言わば「教会公認の哲学」となつたのであり、その後の聖トマス研究をさまざまな意味で方向づけることとなつた。⁽⁶⁾

吉満はこれらを念頭に置き、マリタンの『ベルグソン哲学批判』が有する独自性を正しく理解すべきだといふ見解を提示する。マリタンの考えに対して親近性を示すカトリックの哲学者は「嘗つてと同じく今日も尚ほ」数少ないものの、「セルテイランジュの如きドミニカンからロマーエルの如き少壮のエズイットに至るまで」、彼らの共通項は、ベルクソン哲学からキリスト教哲学への接続可能性を考えることである(六六)。これに対してマリタンの解釈は、彼らの解釈とは性質が異なる。『ベルグソン哲学批判』は、「その成立において、その意味において、その哲学的立場において全く異つた独得のそれ自身の意味を持つ作品として」(六六)評価されなくてはならない。言い換えるならマリタンは、他の哲学者たちのように最初からキリスト教哲学との結びつきを目指したのではなかつた。彼はベルクソン哲学と聖トマスの哲学を対比した結果として、「カトリシズムの発見」、

「否な神とその教会の真理の発見」に至ったのである（六七）。

四 マリタンと聖トマスとの出会い

では実のところマリタンは、いかにして聖トマスの哲学と出会ったのか。吉満曰く、マリタンはこれについても第二版序文において語っているという。マリタンがドイツのハイデルベルクに留学中の一九〇八年のことであった。突如としてベルクソン哲学の「深き相克」に直面したマリタンは、「退つ引きならぬ選択」を迫られる（六七）。ベルクソン哲学のなかに二つの立場が併存しているのではないかとマリタンは考えたのだ。のちに「二つのベルグソニスム」と称される先述した二つの立場、理性的概念を否定的に評価し、「概念は真の实在を媒介せぬ実用的価値のものとなす立場」（「事実のベルグソニスム」と、神の神秘性は概念を介した類比によって把握されるという、「理性の实在捕捉能力を前提する信仰真理の把持の立場」（「志向のベルグソニスム」）の発見である（六八）。

理性的概念に与えられる評価が二重になっていると考えたマリタンは、最終的にベルクソン哲学を乗り越える道を選ぶわけだが、吉満はこれを契機にマリタンと聖トマスの邂逅がなされたと考ええる。「相克の調停すべからざるを知つたとき、こゝにベルグソンを真実に克服して、寧ろ『志向のベルグソニスム』における絶対者の把握と精神の靈性の確立とを健全なる理性の別途なる形而上的考察によつて実現するものとして聖トマスに出会つた」（六八）。こうしてマリタンは、「志向のベルグソニスム」をあるべき姿で実現する理論として、「事実のベル

グゾニスム」とは異なる仕方では理性を扱う聖トマスの形而上学を取り入れていくことになる。

一九〇八年はベルクソンの『創造的進化』が刊行された翌年にあたる。吉満によれば、このころはまだ多くの人々が、理性的概念の否定の上に「形而上学と宗教性の復興さるべき」を、またエラン・ヴィタールや創造的進化といった考えが「スコラ的神理念と化せらるべき」を、ベルクソン哲学に対して求めていた(六八)。そのようなときにマリタンが聖トマスの哲学を捉えたのはなぜだったのか。吉満は次のように述べ、あらためてマリタンの独自性を伝えている。「チボーデなどが考へるであらう如く単なる反動的な御用哲学の權威に據らんとした結果ではなく、自由なる理性の自然的光を力強く肯定し、以て理性の健康を回復せしめ、人間性そのものの地盤において確固たる形而上学を樹立せしめるものとして、新鮮なる感覚そのものを以て、ベルクソンよりも古くしてベルクソンよりも永久に新しいものとして聖トマスの哲学が発見されたからに外ならなかつたからである」(六八)。すなわちマリタンは、ベルクソン哲学を敵視する目的で批判を展開したのではなく、「事実のベルグゾニスム」が否定した理性的概念を回復させたいという純粹に哲学的な意図のもとに、「志向のベルグゾニスム」に対して「人間性そのものの地盤」を確保しようとするなかで、聖トマスの形而上学に出会ったのだと考えられるだろう。

これらを踏まえて吉満は、ベルクソン哲学批判におけるマリタンの問題意識についてまとめている。それによると、「事実のベルグゾニスム」は、「その学説の原理の内的必然性を以て」(六八)「志向のベルグゾニスム」を破壊することになるといふのがマリタンの指摘の核心である。「その原理の内的必然性」とは、「事実のベルグゾニスム」が持続の直観に基礎づけられていること、それにより理性的概念が否定されることから帰結する内容を

指していると思われる。つまり「事実のベルグソニスム」では、「その反理性主義的認識形而上学」と「実体なき純粹成生の一切時間化的經驗主義」によって、「志向のベルグソニスム」が目指す絶対者の理性的把握が必然的に不可能となる（六八）。マリタンはこれを徹底的に論じること、聖トマスの理性的实在把握の形而上学（六八）のもとに、「志向のベルグソニスム」を新たに生かす道を探ったのである。

結

以上のように本稿では、吉満義彦の論文「ベルグソンとマリタン」の第一節「二つのベルグソニスム」を取りあげ、ベルクソン哲学への批判に見られるマリタンの立場の独自性に注目してきた。吉満による議論を通して示されたのは主に次のようなことである。一、マリタンによるベルクソン解釈が他の哲学者たちから理解されづらいのは、アプローチの仕方が異なっているからである。二、マリタンによるベルクソン哲学の批判は、聖トマスの思惟に現実性を獲得させるというマリタン自身の哲学の端緒となった。三、『ベルグソン哲学批判』は、マリタンがベルクソン哲学と聖トマスの哲学を対比した結果として、カトリシズムとその真理の発見に結びつく点で重要である。四、マリタンがベルクソン哲学を批判したのは純粹に哲学的な意図においてであった。したがってマリタンはベルクソン哲学を乗り越える途上で聖トマスと出会ったのであり、決して戦略的に聖トマスを用いたわけではなかった。

なお、本稿で取りあげなかった第二節「理性と実在するもの」では、マリタンが問題とするベルクソン哲学の

形而上学的価値が、ベルクソンの理性観をめぐって論じられることを吉満は明らかにしている。こちらは次の機会に扱うこととし、本稿と合わせて、今後マリタンを通してベルクソン哲学を解明するための布石としていきたい。

註

(1) 本稿では一九四一年四月発行の『思想』第二二七号に掲載されたものを参照している(岩波書店、六一〜七八頁所収)。同年一月のベルクソンの死去を受けて組まれたベルクソンの追悼特集のなかの論文である。引用箇所および参照箇所は、ページ数を()に入れて文中に記す。なお、同時期には各雑誌に追悼特集が掲載された。詳細は宮山昌治「昭和期におけるベルクソン哲学の受容」(『人文』第五号、学習院大学、二〇〇六年、五七〜七九頁所収)を参照。

(2) マリタンは学生時代に無神論的生物学者ル・ダンテク(一八六九〜一九一七)の弟子であり、また唯物論者でもあったが、彼をそこから解放したのがベルクソンだった(六五、六七)。したがってカトリックにおいてマリタンは改宗者だったのであり、そのことがマリタンの立場の独自性を生み出していると思われる。若松英輔はマリタンと、プロテスタントからの改宗者であった吉満の共通項を見出す。「彼が改宗者であり、転向者であることは、吉満同様、マリタンを理解する上で重要な事実である。彼はカトリシズムのどこに、人々の『躓き』があるのかを熟知しており、また無神論と唯物論が何を時代に問うているのかを知っている」(若松英輔『吉満義彦 詩と天使の形而上学』、岩波書店、二〇一四年、七八頁)。ベルクソンとマリタンのあいだにも、カトリックに対して外部の視点を有する点で共通項が見出される。ベルクソンは晩年にカトリックに接近し、遺言でカトリックによる葬儀を希望したといえ、ユダヤ教徒として同胞と同じ立場にいることを願い、最後までカトリックの外部にとどまった。吉満の回想から、ベルクソンに対するマリタンの思いを垣間見ることができる。「或る日マリタン教授宅での夕べの食卓においてであつたと思ふ、誰かがベルグソンが最近聖テレジアのミステイ

クを研究してゐる由であるが、この人がカトリックなどになれるものだらうかと言つた疑惑の念を洩した時に、言下に「*Qui sinit?*」(神のみぞ知るの意)と温い眼ざしを以て我々に見向かれた時の印象を忘れ得ない(六五)。マリタンの脳裏には、自らがカトリックを志すきっかけとなつたベルクソンの姿が浮かんでゐたことだらう。そのマリタンだからこそ、独自の立場からのベルクソン解釈が可能だつたと言えよう。

- (3) この著作には邦訳がないので、日本語タイトルは吉満の表記に準じた。後述するように、長らく絶版であつたが一九三〇年に第二版が刊行され、その際に序文が付加されている (*La Philosophie bergsonienne, études critiques*, Paris, Rivière, 1913: *Seconde édition revue et corrigée et augmentée d'une préface de 86 pages*, Paris, Téqui, 1930)。なお一九四五年に死去した吉満の目には触れていないが、一九五四年に英訳版が刊行された際には新たに「英訳版への前書き」(*Avant-propos à la traduction anglaise*)も付加されている。そのなかでマリタンは、第二版の時点ではまだベルクソンの『道德と宗教の二源泉』(一九三二)が刊行されていなかったため、自らの研究が必然的に不完全であることに言及している。その後いくつかの章が追加されるなどの改訂を経て、現在この著作はマリタンの著作集に収められている。Jacques et Raïssa Maritain, *Œuvres Complètes*, Volume 1, *Édition publiée par le Cercle d'Études Jacques et Raïssa Maritain*, Éditions Universitaires Fribourg Suisse, Éditions Saint-Paul Paris, 1986。

- (4) 「一九二八年ベルグソンがノベル賞を受けた折の『文芸週報』(*Nouvelles littéraires*, 15 déc. 1928)に九鬼教授等の寄稿と共にパピニのごとき外国寄稿者の文章を当時巴里で読んだ記憶が誤つてゐなかつたなら、パピニは確かこのマリタンの所謂『二つのベルグソニスム』を取上げてゐた如くである」(六五)。

- (5) 稲垣良典『トマス・アクイナス』、講談社、一九九九年、四八九頁。

- (6) 稲垣良典「国際トマス学会報告」、『哲学』一九七五巻二五号、日本哲学会、一九七五年、一九九〜二〇六頁所収、二〇二頁参照。

- (7) 若松英輔『吉満義彦 詩と天使の形而上学』、八〇頁。